

## 第5回 校長会議あいさつ

R8.7.15 稲垣

6月末からスタートした部活動の市内大会が終わりました。台風のために延期を余儀なくされた屋外競技もありましたが、その後は熱中症の心配も少ない状況下で試合ができました。今年は、アジア大会の影響で大きな会場が使えないために、西三河大会の出場枠は例年の半分となりました。そのため、幸田町との出場決定戦を行う競技もありました。いずれの会場においても、選手はもちろん応援する生徒たちも、生き生きと輝いていました。この姿を目の当たりにすると、部活動の地域展開の行く末が案じられます。できる限り多くの生徒が、スポーツや文化に親しみ、心から楽しめる環境を求めていきたいと思います。

先日のある新聞に「メリットそれぞれ『子どもに選ばせて』』という見出しがありました。何のことかと思えば、何と「教科書は紙かデジタルか」という話です。愕然としました。記事を読んでも、件の見出しは、どこかの中学校教諭談の引用でしたが、それにしてもこれを見出しに掲げる新聞社の意図は理解に苦しむところです。「教科書を教えるのでなく教科書で教える」は、ベテラン教師の中では常識で、目の前の子どもたちに合わせて、教え方を創意工夫します。教科書はそのための中心的なツールで、授業を創るためには、教材研究は不可欠になります。それを子どもに委ねるなど、浅慮遠望のそしりは免れません。この論調でいくとしたら、そのうちに教科書採択も生徒のアンケートになってしまうのでしょうか。

一方、過日、日曜日の新聞に、大人と子どもとの関係に警鐘を鳴らす記事を目にし、少し留飲を下げました。「『お願い』する親たち」と題して、冒頭に子どもに対して、「やめなさい」ではなく、「やめてください」と言う親が増えてきたことが例示されます。子どもの行為をはっきりと禁止できない親には、子どもの自己肯定感を高めなくてはならないという強迫観念があり、その背景には、親子観における「対等」への誤解があるのではないか、「否定」への恐れからくる肯定や対等が、親子の正常な関係をうやむやにしているのではと言及されていました。

昨今、子どもの意志を尊重し、子どもに判断を委ねようとするあまり、本来の教育成果が危うくなっているケースがしばしば見受けられます。子どもに方向性を委ねる場合、総合的な学習の時間やアントレプレナーシップ教育のように、その教育的価値を見据えた上で、指導していく必要があります。教師は言うまでもなく、私たち大人が、子どもに嫌われることを怖れていては教育は成り立ちません。たとえその場では嫌われたとしても、後々になって感謝されるのが、教える者の在り方だと思います。